

早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨

予定調和の哲学

-1686年から1705年にかけて、G.W.ライプニッツは知的交流に基づき、どのように真理へと接近したのか-

寺嶋雅彦

序文

本論文の目的は、初期近代ヨーロッパの思想家である G.W.ライプニッツ(1646-1716)に焦点を当て、彼の思想において他の概念と広範なネットワークを形成し、その基幹的な役割を果たす「予定調和」(harmonie préétablie)という概念を歴史的に考察することである。「予定調和」とは、ライプニッツが1695年に実体間の一致および魂と身体の結合を説明するために生み出した表現である。その後、ライプニッツはさまざまな人物と同概念に関し対話を重ね、さまざまな仕方で同概念を論じる。本論文の方法は、できる限りライプニッツ自身が提示する枠組みに沿い、対話を通じてどのように予定調和という概念を彫琢したのか、1686年から1705年の期間に限定し、歴史的な観点から枚挙的に解明することによる。

本論文の主要な成果は三つある。第一に、これまでの先行研究において等閑視されてきた「予定調和」という概念の変化を指摘する点である。その転換点となっているのは、ライプニッツが1698年頃に、「斉一的に」(uniformément)という概念のあり方を導入することにある。ライプニッツはのちにこの概念を、「斉一性」(uniformité)と表現しなおすこととなる。この斉一性の導入によって、予定調和の適用範囲、性質、評価の仕方が大きく変化したこと、さらに、予定調和は「一般的調和」や「普遍的調和」と同じ役割を果たす概念となることが原理的に可能になったというこれまでの先行研究上指摘されることのなかった重大な変化を指摘する。第二に、予定調和の論理的・時間的な導出過程に関しては、検討の余地が残ることを指摘する点である。第三に、予定調和という「仮説」をライプニッツ自身がどのように証明したのかという点にも焦点を当て、少なくとも本論文で検討したテキスト群においては、二つの箇所ですべて「証明」を試みていること、また、その証明の仕方が異なっていることを指摘する点である。

第1章 『形而上学叙説』とアルノーへの応答—個体的実体の表出、痛みの感覚、認識、運動—

本章では、『形而上学叙説』、および、アルノーとライプニッツの往復書簡に基づいて、「前—予定調和」に該当する「一致の仮説」および「併起の仮説」を考察した。本論文にとってとりわけ重要な成果は、以下の三点である。

第一に、『形而上学叙説』においてすでに、前—予定調和から予定調和にかけておおむね一貫している予定調和の適用範囲と性質を提示している点である。つまり、前—予定調和は「何」に対する説明であるのか、という問いに対して、その「何」を予定調和の適用範囲として挙げるのであれば、実体間の一致、および、魂と身体の結合という二つの対象を挙げるができる。他方で、予定調和はどのような説明であるのか、という問いに対して、そのあり方を性質として挙げるのであれば、無窓性、個体的実体の表現的本性(全体性、身体性、自発性、適合性)、魂と身体の法則の独立性、個体的概念の完足性という性質を挙げるができる。

第二に、アルノーへの反論において、諸命題から一致の仮説や併起の仮説といった前—予定調和を「証明」できるとライプニッツ自身が述べていることである。ただし、この場合の「諸命題」が具体的に何を指しているのかは解釈の余地が残ることも指摘した。本論文では、すでに予定

調和の性質として挙げた無窓性、個体的実体の表現的本性(全体性、身体性、自発性、適合性)、魂と身体の法則の独立性、個体的概念の完足性を、諸命題のあり方に含めると解釈した。

第三に、アルノーへの反論において、とりわけ痛み感覚と身体の状態の認知の先後関係(あるいは原因と結果の関係)、神経を通じた栄養摂取や消化に対する表出あり方、リンパ液と土星の衛星の運動をめぐる身体内の表出のあり方など、アルノーからの具体的な質問を機会とすることで、前—予定調和に含まれる「表出」の抽象的な(あるいは形而上学的な)議論を用いて、身近にあるさまざまな出来事の基礎的な仕組みを整合的な仕方で説明する機会となった点である。

第2章 『新たな説』—対抗仮説の提示、見解の内容、利点と評価—

本章では、『新たな説』に基づいて、前—予定調和という仮説が向き合う問い、先行する見解、仮説自体の内容、その利点と評価を、ライプニッツが提示する順番に沿って逐次的に考察した。ライプニッツは、『新たな説』において、実体間の一致および魂と身体の結合に関して、これまでの自身の見解に対する新しさではなく、形象の伝達や神の奇蹟に頼るといった対抗仮説に対する新しさを提示したのであった。したがって、その大筋としては、『形而上学叙説』やアルノーへの反論において提示した見解とほとんど変化していない。前—予定調和の適用範囲は、実体間の一致および魂と身体の結合であり、性質は、魂の表現的本性(全体性、身体性、適合性、自発性、予定性)、魂の無窓性、魂と身体の法則の独立性である。表現的本性として予定性が加わり、また、魂と身体の法則の独立性を前—予定調和と明瞭に結びつけているという点のみ、異なっている。

とはいえ、『新たな説』では、コンパクトかつ包括的に前—予定調和の見解を提示し、さらにいくつかの細かな、とはいえ重要な論点を提示することとなった。例えば、哲学における好ましい説明の仕方としての神の知恵を推測した「理由」の提示というあり方、個体的実体と個体的概念から単純実体とその内奥への収斂、形而上学的に厳密な語りと通常の語りの区別、実体間の一致および魂と身体の結合の導出の仕方とこれらの関係などである。

第3章 フシェへの応答—予定調和の出現—

本章では、1695年のフシェへの反論に基づいて、予定調和という「仮説」や「説」に対する導出関係、内容、説明としての身分、評価を考察した。『新たな説』の公表からわずか数ヶ月しか経たない中で執筆したものであるため、その思想そのものに変化はない。しかし、まさに「予定調和」という表現が初めてライプニッツの執筆物の中に現れる機会となったという点で、非常に重要なやりとりとなった。また、思想そのものの変化は見られないものの、新たな光を照らした部分もある。本論文にとってとりわけ重要な成果は、以下の四点である。

第一に、前—予定調和の導出過程を提示していることである。ライプニッツは、『新たな説』§14においては、あまり明瞭な仕方で一致の仮説や併起の仮説の導出関係を示すことはなかった。それに対し、フシェへの反論では、「一性」に関する見解こそが、ライプニッツの「調和の仮説」や「併起の仮説」よりも基礎的なものであるという概念の導出関係に関わる論点を明瞭に示すこととなった。しか

し、この導出関係に関しては、解釈上の困難があることも指摘した。それは、一性に関する見解とは対照的に、力の量の保存および運動の方向の保存と予定調和との関係は必ずしも明瞭ではないことである。本論文ではさしあたり、一方で予定調和が二つの法則を連続的に生み出すという論理的な導出関係になっており、他方で、『弁神論』§61での記述を踏まえて、時間的な導出関係としては、二つの法則から予定調和へと至ったと解釈した。

第二に、説の有用性をフシェから問われる中で、「形象の伝達」および「神の新たな助け」に頼らないで済むことを示しつつ、この両者には、魂の側の自然法則が欠けていることを理由として挙げている点である。ライプニッツは魂も自然法則に従うという、「自然」の枠組みを示し、「法則」の重要性を強調している点に注目すべきである。

第三に、仮説や説のあり方に対する評価である。ライプニッツによれば、これらは、事後的に到来するもので、現象ないし現れを救うためにある。したがって、本来的に結果に基づいて証明されるア・ポステリオリなものに過ぎず、現象や現れという結果をうまく説明できていればそれで十分であるが、フシェがいうように、原因に基づいて証明されるア・プリオリなものであるならば、説明としてなお良いものとなる。

第四に、「物的実体間の交渉」と明確に述べていることである。『新たな説』においては、「実体」が、単純実体を指すのか、あるいは、単純実体と身体の複合物である個体を指すのか、その都度解釈する必要があった。それに対し、このフシェへの反論では、明確に、後者の単純実体と身体の複合物である「物的実体間の交渉」という表現によって、実体間の一致を示している。

第4章 ラミへの応答－予定調和の拡張へ－

本章では、1698年および1704年のラミへの反論に基づいて逐次的に考察することで、予定調和に対して新たな光を当てた部分を明確にした。本論文にとってとりわけ重要な成果は、以下の四点である。

第一に、魂と身体の不分離をむしろ基礎に据えて、両者の結合を示していることである。つまり、身体なき浮遊する魂はありえず、他方で魂なき抜け殻になった身体もありえず、いかなる場合でも魂と身体は不分離であることを前提にし、そこから両者が結合していることを示している。ここで注意すべきは、不分離であることと結合していることは同値ではないことである。というのも、ここでいう結合とは、対応関係にあることであるため、不分離であるからといって一方が他方に対し対応しているとは限らないからである。

第二に、神が魂に与えた「本性」の役割を強調していることである。例えば、ライプニッツは、「現在の感覚は、先立つ感覚の継起であり、すべて一緒に魂の本性そのものから来る」と示し、神が与えた本性を通じて魂は神から感覚を得ていること、また、「被造物が自身の持つ秩序を実行できる本性を神が与えないのであれば、神が一定の法則を生み出すことは奇蹟を避けるためには十分ではない」と示し、魂は神が与えた法則を実現するための本性を持っているという点において予定調和は機会原因論と異なることを提示していた。これは、「調和の説」では、「事物の本性」という理由によってあら

ゆるものを結びつけるという点と一致する。また、「本性」(nature)と「不可欠」(essentiel)とをわけ、前者を自然的なものに、後者を必然的なものに割り当てることで、この二つを区別する点も重要である。というのも、この二つの概念の区別によって、ワインを飲み過ぎてしまった場合の墮落というあり方も説明することができ、さらに、それは影響説や機会原因説よりも好ましい(とライブニッツが判断する)仕方で変調のあり方を説明できているからである。

第三に、身体の必要性を異なる観点から言及していることである。フシェへの反論においては、実体の多さへの肯定的見解、および、あらゆる実体と神の計画との関わりから身体の必要性を示していた。つまり、神の意志や知恵に基づいてその必要性を説いていた。それに対し、ラミへの反論においては、世界の創造者たる神としての役割を十全に果たすことに基づいて身体の必要性を説いている。いわば、神が神であるためには、つまり、被造的なものから愛を受けるに足る存在であるためには、身体も作り出す必要があったことを示している。

第四に、予先形成と予定調和との明確な結びつきを提示していることである。1698年からすでにその結びつきを示しており、1710年には予定調和の時間的展開であるとその明確に位置付けを行うのに対し、1704年の反論においては、その途中段階にある。重要な点は、この1704年という時期にその結びつきを明確に示していることである。というのも、「斉一性」に重点を置くことと、予先形成と予定調和との結びつきを置くことは、ほとんど重なった時期の出来事だからである。

第5章 ベールへの応答－魂の本性に基づく自律性の強調と斉一性への着目－

本章では、1698年および1702年のベールへの反論に基づいて、逐次的に考察することで、予定調和に対して新たな光を当てた部分を明確にした。本論文にとってとりわけ重要な成果は、以下の四点である。

第一に、ライブニッツは、魂による身体への影響を否定するためだけではなく、感覚や表象の変化に対しても、自然法則(慣性の法則)をモデルとして提示するようになることである。『形而上学叙説』§26においては、プラトンの想起説をモデルとして、表象の展開を説明していた。それに対し、このベールへの反論においては、慣性の法則へとモデルが変化している。その変化の理由を示すことは簡単ではない。しかし、『形而上学叙説』の頃では個体的概念の完足性、つまり、個体に生じるあらゆる出来事は述語として、その個体という主語に含まれているという枠組みによって個体の個性を規定していたのに対し、『新たな説』においては、表現的本性によって個体の個性を規定することとなり、静から動へという動きとして捉えることができると指摘した。この点や、斉一性のあり方を踏まえれば、プラトンの想起説のように、すでに固定化された観念を想起するという枠組みではなく、魂のうちに含まれるさまざまな微小表象が互いに影響を与え合い多様に働きながら、後続するものが生じるという動性ととも呼ぶべきものの方が表象の変化を表すのにふさわしいと判断したからという理由を提示することができる。このように、本論文で、静から動へと、表象が依拠するモデルが変化していることを指摘している点は、他に類例がなく、本論文の独創的な成果として強調すべきものであることも指摘した。

第二に、ラミへの反論と同様に、魂の本性による説明を強調していることである。本論文では、時計の比喩の用い方が『第二解明』と微妙に変化していることに依拠して、神の命令と神によって与えられた本性によるその実行とを分け、実体の自律性(さらには、身体の自律性)を強調している点を指摘した。ライプニッツ自身の認識では、予定調和説には、自律した自然のやり方があるという点において、他の仮説よりも優れているのである。

第三に、最も重要な光の当て方として本論文で指摘したいのが、「斉一的」への着目である。1698年の反論においては、「斉一的」と「同様に」を区別し、「斉一性」への着目が始まる。ライプニッツは、放物線の運動をモデルとしながら「斉一的」と法則に従った多様な仕方での変化を結びつけ、他方で直線の運動をモデルとしながら「同様に」をいわば変化のない変化と結びつけることとなる。この違いは、上述したプラトンの想起説から慣性の法則へという変化と重なりあう。つまり、プラトンの想起説は、「同様に」におおよそ対応し、変化のない変化を意味しているのに対し、慣性の法則は、「斉一的」に対応し、多様な仕方での変化を意味しているという重なりである。さらに、1702年の反論では、単純で斉一的な変化の仕方という「単純」と「斉一的」を組み合わせている点もまた、注目すべき論点である。ライプニッツは、この反論においては、物質主義者たちが想定するような原子と魂に共通する変化の仕方として、「単純」と「斉一的」という二つの性質を示しているが、『弁神論』においては、神の道の基準として示すこととなる。本論文では、このような変化は、1703年の『人間知性新論』においてすでに明確になり、さらに1704年のマサムへの反論において一つの頂点に達することを指摘した。

第四に、伝統思想の良き部分が集まったものとして自説を位置付けている点である。ライプニッツは自らの見解を「エピクロスとプラトン、つまり、最も偉大な物質主義者と最も偉大な観念論者の仮説の中にある良いものがここで集まっている」と示し、身体においては物質主義的で、魂からの命令を必要とせず自律していること、他方で魂においては観念論的で、身体の機械的法則を極めると魂の活動原理に遡り、とはいえそれは身体へは作用しないことを、伝統思想どうしの結合という仕方、自説との結びつきを示しているのである。

第6章 『人間知性新論』、マサムへの応答、『生命の原理と形成的自然』—神の道、自然の斉一性をめぐる説明、予定調和の俯瞰—

本章では、1703年から1705年にかけて執筆された三つのテキストに基づいて、アルノー、フシエ、ラミ、ベールとの対話で得た予定調和に関する諸論点をどのように固定化し、新たな側面に光を照らしているのかを考察した。本論文にとってとりわけ重要な成果は、以下の六点である。

第一に、『人間知性新論』の本論部分の冒頭において、ライプニッツは自らの思想を、諸思想を調停するものであり、さらに、自らの説の形成過程の雑食性、および、説としての前進性を示していることである。形成過程の雑食性は、ライプニッツの思索がその広さを増し、また、その深さを得る過程に伴って、最善のものを取り入れることで変化し、拡張していくことを自ら正当化している。また、説とし

ての前進性やその前進性をもたらす雑食性は、ライプニッツがさまざまな仕方で予定調和の導出関係を示すことに対しても一種の正当化であるとみなすことができる。

第二に、予定調和の論理的な導出過程として、斉一性の原理を加えることである。本論文ではすでに、「一性」からの導出と、二つの「自然法則」からの導出を検討してきた。ライプニッツは、マサムへの反論においてさらに、「必要でない限り、被造物において、我々の経験に対応することしか想定しない」というこの格率によって、私はさらに自身の予定調和説へと導かれた」と述べ、斉一性の原理を加えている。このように、導出過程を拡張させていることは、上述した雑食性や前進性と対応していると解釈することができる。つまり、ある一つの仕方で予定調和を導出し、それをより確固たるものとするという方向性のみではなく、良いと判断したものを取り入れることによって、複数の仕方で予定調和を導出するという方向性にも進んでいるのである。

第三に、マサムへの反論において、予定調和を明確かつ周到な仕方で「証明」していることである。1686年7月14日付のアルノーへの反論においては、諸命題から、前—予定調和を「証明」していた。それに対し、1704年6月30日付のマサムへの反論においては、仮説から真理への上昇が可能であるという周辺部の議論を整理することから始める。その上で、人間の知性と神の知恵との一致を示し、予定調和の自然的なあり方を究極的な根拠として、予定調和説のみが魂と身体の結合を説明するための仮説として、また、世界創造にまつわる「神の道」を説明するものとして、唯一正しいことを「証明」したのである。

第四に、マサムへの反論において、理性的な人々の同意という探求の共同体への信頼を重視していることである。ライプニッツが探求している真理としての「神の道」は、一方で、神の知恵と理性的被造物の知性との「光」を通じた連続性によって、証明可能性が残されている。しかし他方で、その地点にまで至るためには、自らの知性だけでは頼りない。というのも、経験的証拠などを頼りにすることはほとんどできないため、誤った道に進んでしまっている可能性もあるからである。そこで、自らをも含めた理性的に考えることができる人々が認めていることを足場として、真理へと上昇しようと試みている。ライプニッツは、理性的な人々の同意という探究の共同体への信頼を選び、仮説から真理への上昇が可能であることを、神の知恵と理性的被造物の知性との光を通じた連続性を担保することによって示したのである。

第五に、『生命の原理と形成的自然』では、予定調和の利点として、近接作用という自然学の大原理を保存することを明瞭に示している。近接作用という自然学の大原理の保存が成り立つのは、予定調和がもたらす魂と身体の法則の独立性によって、物体(ないし)身体に対する魂の作用を排除することが可能となるからである。本論文で考察したこれまでのテキストでは、予定調和の利点として自由、魂の不死、神の存在証明を提示していた。しかし、『生命の原理と形成的自然』では、その主題に応じて、さらに自然学の大原理の保存も利点として提示しているのである。この点も、一種の雑食性、前進性の表れと見なすことができる。

第六に、『生命の原理と形成的自然』の最終部において、「斉一性」によって規則の「普遍性」を確保し、それによって予定調和の妥当性と説明の容易さを示していることである。本論文の序文で示し

たように、ライプニッツは、もともと「斉一性」を予定調和の性質や評価に入れていなかった。しかし、1698年のベールへの反論から、斉一性を導入し始め、その概念を彫琢し、1705年には予定調和という仮説を普遍妥当的な真理へと押し上げるために、斉一性を用いることとなる。

終章「予定調和」の哲学

本論文では、「斉一性」の導入を予定調和における転換点とすること、予定調和の論理的・時間的導出過程には解釈の余地が多分に残ること、ライプニッツ自身による予定調和の「証明」を明確にしつつ、とりわけマサムへの反論においては健全な懐疑と信頼を両立させていること、を主張したことを主たる成果として示した。しかし、ライプニッツが残した予定調和に関する議論は、これらのまとめには尽くされない豊かさで溢れており、ライプニッツの思想体系の広範な領域を覆っている。したがって、彼の思想体系の全てを覆っていないという意味である一定の限界を伴いながらも、ライプニッツの哲学を「予定調和の哲学」と名づけることができるのである。